5　考古学的調査

5-1　旧・道仙化学製陶所窯跡の発掘調査

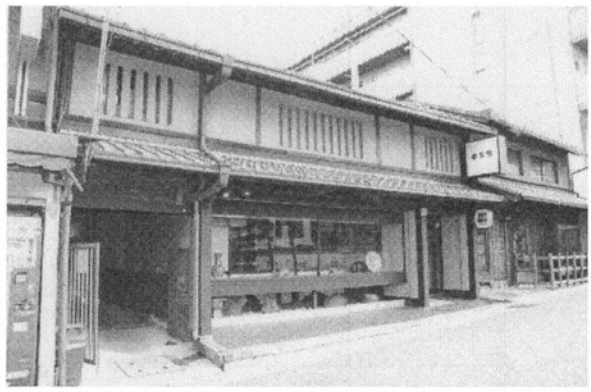
木立雅朗

はじめに

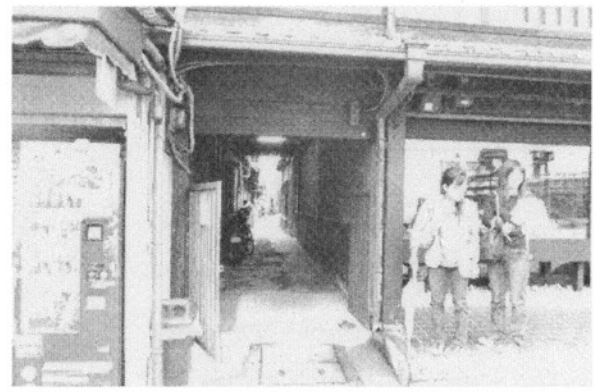
京焼を中心としたやきものの小売り・卸を営んでいる五条坂・楽只苑は、はやくから町家建築を生かした店舗で営業しており、五条坂の一つの顔をなしている。この町家建築はもともと、道仙化学製陶所、入江道仙の社長宅兼事務所であった。楽只苑はその土地・建物を譲り受けたのである。重厚な町家建築はそこに陳列された高級な陶磁器とともに目を愉しませてくれる。この町家の脇の奥に通じる路地を通り抜けると、急に視界が広がり、小山が現れる。その小山の上にはサクラの木が繁っている。まだ 10 年程しかたっていないサクラだというが、成長が早く、花とサクランボが関係者を愉しませてくれる。五条坂の真ん中で花見ができる驚きは、すぐ次の驚きにかき消される。じつはこの小山はかつて道仙化学製陶所の窯跡であった。窯の部材が崩れ落ちた場所だからこそ、サクラは根をスクスク張って成長することができた。確かに、サクラの木の下にはたくさんの窯道具が散乱している。

はじめて現地を訪れれば不思議な空間に迷い込んだような気分になると同時に、「ここが五条坂なんだ」とその歴史を強く意識できる。窯跡に至る狭い路地は、まるでタイムトンネルのように私達を「茶碗の町・登り窯の町・五条坂」にいざなってくれる。

登り窯を保存・活用する会の佐野春仁氏は、楽只苑社長との協力して、この窯跡を生かした町おこしを検討されていた。その中で、考古学的な調査も考慮され、その誘いを受けた。昭和 40 年代まで稼働していた窯であるが、京焼窯跡の考古学的な調査としては極めて貴重な遺跡であり、喜んで引き受けた。



町家建築を生かした楽只苑（旧道仙化学陶器所）



窯跡に至る路地

1．調査前の状況と入江道仙・道仙化学製陶所

窯跡は操業停止後、しばらく放置されていたが、危険だということで天井部分を意図的に壊したという。その後、窯屋などが崩壊したまま放置されていた。操業停止の時期など詳しい聞き取り調査はまだ十分ではないが、昭和 40 年代の公害防止条例による操業停止以前のことのようだ。調査前には、崩落した窯屋の部材などが放置されており、雑草や木が繁茂していた。それらの撤去は佐野春仁氏を中心に京都建築専門学校の学生諸君に行っ

て頂いた。この作業は発掘調査以上に重労働であったと思われる。

入江道仙は五条坂の伝統的な陶家のひとつであり、五条坂・若宮八幡宮に奉納された石灯籠の発起人として清水六兵衛らとともに名前を刻んでいる（「大正三年八月建之」）。ある段階から化学陶器に比重を移したようで、現在でも年配の陶芸家は「道仙の乳鉢はよかった」と高く評価し、廃業を惜しんでいる。窯跡の周囲には多くの化学陶器が散乱している。この遺跡は、雅びな焼き物の町・五条坂で茶碗類ではなく、「化学陶器」という工業製品の製造を行っていたことを直接教えてくれる貴重な証人である。

窯跡に至る路地の両側は、かつて道仙化学製陶所の職人長屋であったという。その一部が事務所として使用されていたのか、今も「道仙化学製陶所」の看板が掲げられている。窯の更に奥にかつての工房があったというが、今は別の工房となっている。

調査前の窯跡の状況

焼成されていた化学陶器の一部

若宮八幡の石鳥居に刻まれた「入江道仙」

かつての道仙化学陶器所職人長屋

旧職人長屋に今も残る「道仙人化学所」看板

2．調査の成果

調査はまだ途中であり、全体像を提示できないが、中間報告として概要を紹介しておきたい。

調査開始の状況

5室目の調査風景

調査ではまず状況を見るために、堆積土がもっとも薄いと思われた一番高い部分のトレンチ調査からはじめた。その結果、窯の天井部分は崩されているが、下部分は極めて良好に残存しており、しかも床面には匣鉢が並べられた状態で埋まっていることが確認できた。そのため、トレンチを広げ、部屋全体の状況を確認することにした。併行して周囲の掃除を行ったところ、部屋を区切る壁が随所に確認され、窯が胴木間と６つの部屋で区切られた連房式登り窯であることがわかった。発掘調査した一番上の部分は５の間と６の間に相当する。６の間は一番広い、５の間との段差が低いもので、おそらく素焼きなどに使用された部屋だと想定されるが、部屋の中央付近に縦方向の間仕切りが検出された。わざわざ部屋を狭くした意味は不明である。

5・6の間　発掘情況（南から）

5・6の間　発掘情況（北から）

６の間にはタナイタやツクが多数出土しており、素焼きのための棚組がなされていた可能性があるが、全面に棚が組まれていたような量ではない。また、出土する範囲は間仕切りの手前側(西側)だけであり、東側は使用されていなかった可能性がある。

↓５の間には匣鉢が２列積み上げられていた。間を区切るオオゲタが３段分程度残っており、匣鉢もその高さまでが残存していた。角匣鉢、丸匣鉢などいくつかの種類の匣鉢が積み重ねられていたが、比較的大きなものが多く、大きさは揃っている。窯跡周辺に散布していた小さな匣鉢などは一切確認できなかった。積み上げられた匣鉢の内部には製品な

5・6の間匣鉢など出土情況（東から）

5・6の間匣鉢など出土情況（西から）

図1　第5・6の間及び煙り出し平面図

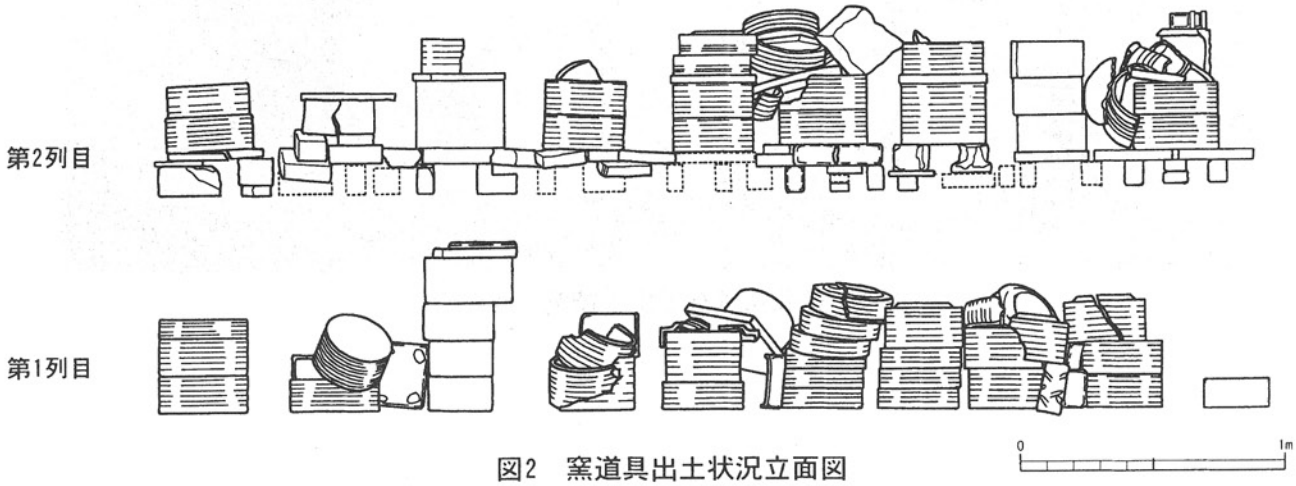
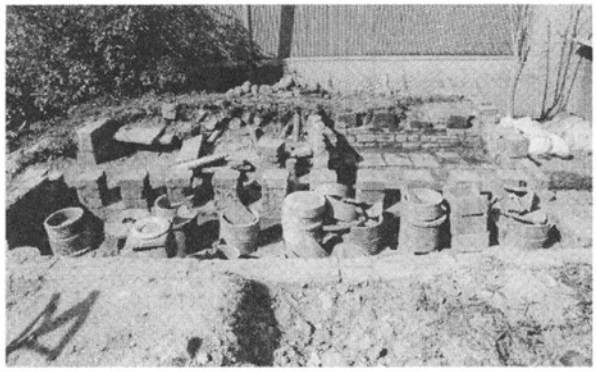


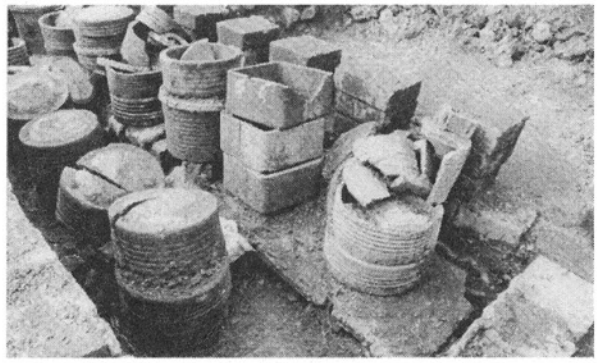
図2　窯道具出土状況立面図

どは入っておらず、積み上げた状態で匣鉢を保管していたのだと想定される。匣鉢の焼成具合は様々であったが、よく焼けている匣鉢はほとんどなく、焼成の甘いものが多いように感じた。これらは化学陶器用ではなく、陶器焼成用の匣鉢ではないかと想定している。匣鉢の内部に陶器を窯詰めしたような痕跡があること、匣鉢に鉄絵で名前が記入されたものが目立つことなどから、陶器の貸し窯をしていたのではないかと推測されるためである。化学陶器とよぶが、実際には磁器であり、この部屋ではそのような磁器焼成は行えなかった可能性がある。今後の発掘課題であるが、化学陶器を焼成する部屋とそうではない部屋の役割分担・棲み分けがどのようになされていたのか、さらに検討してゆきたい。

5 の間の匣鉢を取り上げたところ、火後の匣鉢列は下にタナイタやオオゲタ片をかませて一段高くしていたことがわかった。火前の列は特に高くしていない。



5・6の間発掘情況



5の間　匣鉢出土状況

匣鉢の取り上げ作業

匣鉢を取り上げた状態　（西から）

匣鉢を取り上げた状態（東から）

石膏型と匣鉢など多量の遺物（胴木間付近）

胴木間の検出状況

胴木間の周辺には表面の土などを除去すると、左の写真のように石膏型や匣鉢・ハマなどが積み上げられた状態や投棄された状態で大量に検出された。石膏型は小形のものもあったが、極めて大きく直径 50 ㎝を越えるようなものもあった。ハマも直径 30 ㎝程度の極めて大きなものがあり、巨大な製品が焼成されていたことを物語る。

投棄された状態の匣鉢などを除去すると、胴木間のカーブした窯壁が現れてきた。クレ（円柱状の天井構築材）で天井を成形している様子もよくわかった。

煙出し部分を一部断ち割り調査したが、明治初年の絵図と同じように、煙突がなく、最後の部屋の狭間穴から直接煙が抜ける構造であることがわかった。おそらく、公害対策が本格化する前に操業を停止したのだろう。

胴木間天井のクレ

煙出し部分の発掘作業

窯の復原　サクラの木が生えている部分が一番高くなっているが、発掘調査の結果、本来なら１の間から２の間に相当する部分であり、もっと低いはずである。しかし、４の間より上の部分を崩した窯壁を下におろして積み上げたため、サクラの木の部分が高くなったことがわかった。サクラは崩落天井がもっとも分厚く堆積した部分に根を下ろしているため、短期間のうちにスクスクと成長したのだと思われる。

また、2 の間より上の部屋は地面の高さより高く、明らかに盛り上げられている。5 の間の東側を一部断ち割り調査したところ、大量の窯壁片や匣鉢などで盛り上げられていることがわかった。それに対して胴木間は地面より明らかに低い。今回は調査できなかったが、多くの廃材が投棄された現在でも焚口に相当する部分は低くなっている。胴木間から焚口部分は地面を掘りくぼめて作っている。

五条坂周辺の自然地形は東山方向（東側）が高く、鴨川方向（西側）が低い。しかし、南北に長いウナギの寝床と言われる町家の敷地内に窯を作るため、人工的な造成によって自然地形を無視して窯を作っている。しかも、この敷地の東隣には隣接して浅見窯が築造されており、現在も残されているが、この窯は道仙化学製陶所とは逆に、北を掘り下げて胴木間とし、南側を盛り上げて各部屋を作っている。入江家と浅見家は親戚同志であったというから、両者が互い違いの方向に窯を作ることで土地の有効活用をはかったものと想定される。

窯跡の全景

3．出土遺物について

窯壁片など　多量の窯壁片などが出土し、発掘した土量の大半は窯壁片や窯道具片で占められていた。それらの量は極めて多く、とても現地で処理できる量ではなかった。通常の発掘調査ではあれば、出土した全てを持ち帰るべきであるが、ここではそれができず、窯壁類のみならず、匣鉢などの窯道具類も選別せざるを得なかった。考古学的にはすべて遺物ではあるが、現代社会においてはすべて「産業廃棄物」に相当するものであり、その量は並大抵のものではない。この点に対してどのように対処するかが、今後の近現代考古学にとって一つのアキレス腱になると思われる。

製品類　窯壁や匣鉢などとは違い、ハマや製品の破片は少なかった。ハマは本来ならばもっと大量に出土するはずであるが、匣鉢や窯壁に比べるとはるかに少なかった。

製品類も匣鉢や窯壁に比べてはるかに少ない。製品のうち、化学陶器（磁器）片に「道仙」の文字が緑色や染め付けで記入されたものがいくつかあった。直径 50 ㎝程度の巨大

な片口鉢（乳鉢？）や耐酸容器と思われる大型品などが目立つ。また、高山耕山製の巨大な不明容器もあった。おそらく、生産に関わる道具を同業者から購入していたのだろう。その他、配電盤・栓・スイッチ類などと思われる様々な部品類が確認される。

なお、化学陶器のほとんどは通常の陶磁器と異なるため、現在の私達の知識では用途が全くわからないものが多い。ここから出土した漏斗状の磁器について、薬学科出身の方から、大学の製薬実習の時に使った経験があると教えて頂いた。前述のように「道仙の乳鉢は質がよかった」という陶芸家の方も多い。今後、多方面に渡る調査が必要である。

化学陶器に比べてはるかに少ないが、通常の陶磁器類もわずかに確認された。おそらく後半の部屋で陶磁器類の貸し窯が行われていたのだろう。前述のように、匣鉢の観察などから、5 の間では陶器の貸し窯を行っていたと想定しているが、匣鉢の隙間から素焼きの大型化学陶器片も出土しており、5 の間で化学陶器の素焼きを行っていた可能性もある。おそらくは 6 の間からの混入であろうと想定しているが、聞き取り調査などで確認する必要がある。

おわりに

2000 年～ 2005 年にわたって行った鳴滝乾山窯跡の発掘調査が、京都ではじめての京焼窯跡の発掘調査であった。重要な発掘成果をおさめることができたが、残念ながら窯体を検出することができなかった。今回の発掘調査は、おそらくは京都では最も新しい年代の遺構の発掘調査のひとつでもあり、はじめての京焼窯跡本体の発掘調査になるだろう。また、近年、関西における数少ない近現代考古学の実践例にもなる。今後に残された課題は極めて大きいが、さらに調査を深めてゆきたい。

なお、この発掘調査は木立の指導のもと、テーマリサーチゼミナールＬＰ（京都の土と社会）、歴史考古学ゼミの学生が中心となって行い、佐野春仁氏と京都建築専門学校学生の援助を受けた。また、楽只苑の全面的な協力を受けた。記して感謝の意を表したい。

調査参加者（2005 年 4 月 23 日。6 の間にて）